
こんなマリオでもいいじゃないか！！

匿名希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなマリオでもいいじゃないか!!

【Nコード】

N9233Y

【作者名】

匿名希望

【あらすじ】

20xx年、キノコ王国のピーチ姫が自称・大魔王クッパに誘拐された！

自分の欲求を満たすピーチ姫を助けるためにマリオは冒険へ。

マリオと他作品の愉快的仲間達が繰り広げるファンタスティックアドベンチャーが始まる！

※この小説は誰でも感想が書けます！

第1話 「冒険だろ!?!」 by マリオ (前書き)

どうも匿名れす。

予定よりはやく出来たんで投降します。

しかしテストが終わったらまたテストで……世の中腐ってますね
(笑)

ではスタートです。

第1話 「冒険だろ!？」 by マリオ

20XX年 9月

自称・現役スーパー配管工ことマリオは悩んでいた。

四年前、俺は「ドンキーコング事件」でその名を一躍世界に轟かせた。

自分と弟主役の対戦ゲームの発売、テニス審判へのスカウト、ビル解体、ピンボールゲームのギャラリーetc……

様々な職、経験に彼の毎日は非常に充実していた。

だが…そんな生活に俺は、徐々に物足りなさを感じていた。

だからテニスの審判、ビル解体の仕事もあっというまに辞めてしまった。

一体、俺の欲求はどうしたら満たされるのだろうか？

そんな欲求不満を抱えたまま今日も適当に寝転がりながら新聞を読む。

ふと巨大な記事に眼がいく、何々…ピーチ姫誘拐だ…？

そうか一国の姫が攫われたのか、どうりで朝から騒がしいわけだ。

「にしてもまさか一国の姫様が誘拐されるなんてね」

全くだ、しかも一部の兵士達もその事件に参加したみたいだな。

主を裏切ってどこぞ出かも知れん相手に着くなんて、随分馬鹿というか阿保というか…。

にしても犯人と思われるカメ一族のクツパとは…？

………何だ、さっきから心の中で猛っているこの…何ともいえない、衝動的なものは…？

「………どうしたんだい兄さん、さっきからやけに体が震えてるけど？」

「え？　そ、そうか？」

やはり……この衝動的なモノは気のせいじゃないのか！？

俺に足りないもの……その答えに今俺は限りなく近づいてる気がする

る……。

「そ、そういえばその犯人グループは何処へ？」

「拠点は突き止めてるらしいよ、けど手中に姫様がいるんで今は動けないみたい」

そりゃそうだろうな…変に行動を起こせば最悪、ピーチ姫を人質にとられる恐れがある。

…もう少し…もう少しで…答えが見つかりそうな、気がする！！

「拠点までの…地図ってあるか？」

「記事の裏側に拡大かして貼って有るけど…それがどうかしたのかい？」

次の瞬間、俺は衝動的に新聞をかつさらうとすぐさま手荷物を準備していた。

そしてあっという間に家を出ていた、ここまでの時間・約20秒。

何故このような行動をとったのか。そう、それは答えが見つかったから。

俺に足りない物は――――――

「冒険だァあああああああああああああああ……！！！！！！」

ってな訳で冒険ついでにピーチ姫を助けに行く事にしました。

ルイージ、留守番任せたぜ！

「……………」

啞然、これが今の僕の心境だ。

突然、兄さんが震えだしたと思ったら新聞紙片手に荷物作って出て行った。

あまりに動作が速すぎてクロッ○ア○プやったんじゃないかと思っ
たよ、マジで。

……あれ、まさか…僕留守番役？

まさか出番もこれだけじゃ————

第1話 「冒険だろ!?!」 by マリオ（後書き）

ちなみにこの作品のジャンルはファンタステックアドベンチャーです。

お間違いないく。

第2話 旅×敵×味方? (前書き)

第2話です、サブタイは某ハンター漫画風にしてみました。

?マークはキノコがかわりです。

ゆっくり小説執筆…と思ったら12月1日にまたテストが……………。

「第2話 ? 1 P L A Y E R G A M E

2 P L A Y E R G A M E

」

マリオ「第2話、レッツエゴォー!!」

第2話 旅×敵×味方？

青い空、真っ白な雲、緑の山々、生茂る野草や筑紫——。

「ああ……これだッ！ 俺が求めていたのはこういうのだったんだッ！！」

マリオはまるでフィギュアスケート選手のようにグルグルと鮮やかに三回転を決める。

長い長い欲求不満から脱した彼の心はストレスなんて見えなくらい透き通っていた。

「さあて、まずは景色を堪能————ん？」

踊っていたマリオの視線にマリオのほうに真っ直ぐ歩いてくる者が入る。

マリオシリーズの名雑魚キャラ・クリボーだ。

彼等は元々はキノコ王国側の兵士だったのだがクッパの起こした事件に伴ってクッパ側に寝返ったのだ。

「オイ、お前は何者だ!？」

マリオに気づいたクリボーは荒々しくマリオに迫る。

迫ってくるクリボーに対し、マリオは全く動じずハア…とため息をつく。

「俺の名前を知らないとはな……まあいい、俺はマリオ…お前を殺す人間だあああああ!!」

「ダニイツ!？」

雄叫びとともに猪突猛進の勢いで向かって来るマリオに思わずクリボーがたじろく。

マリオはトゥツ!という掛け声と共に宙へ舞うと――――

グチャ!

「ひでぶツ!!」

………全体重をかけクリボーの脳漿をブチ撒いた。

「ハッ、どうだ!　これが俺の実りよ――――」

攻撃から三十秒経過、ふと自分の足元に転がっているクリボーの死体を見たマリオは――――

「うええ…おげえ……えぷ…」

胃の中の物を吐きつくしたマリオは口元を手で拭うと覚束ない足取りで立ち上がる。

死体には二度と眼をやらないと誓ったマリオは再び歩き出した。

しばらく歩くと宙に浮くブロックを見つけた。

レンガで出来たブロック、？マークがかかれた黄色いブロック。どちらも重力に逆らい、ぷかぷかと浮いている。

見たこともないブロックを眼にしたマリオのテンションは一気に上昇する。

「おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃ！！」

次々と素手でブロックを叩き割っていくと黄色いブロックからキノコが出てきた。

これこそ皆さん御存知、マリオの必須アイテム・スーパーキノコである。

これを食べる事によってマリオはスーパーマリオになれるのだ。

だが当然、そんな事をマリオが知っているわけがない。

「美味そうだな……どれ……」

ヒヨイと口の中に入れると歯でキノコを噛み千切り磨り潰しスーパ
ーキノコを味わう。

四、五回嚙んで飲み込み二口目を喰らおうとした時、

[illegible]

突然のスーパーキノコの咆哮にマリオは思わずキノコを放し耳を塞ぐ。

「…あ、あの…どちら様…で、しょうか……………」

ビビりながらもおずおずとマリオが話し掛ける。

「スーパーキノコじゃ、ボケェ！！　ところでテメェ！　何で俺を食いやがった！！？」

「あ、いやぁ…そのお…おいしそうだったんで…つい」

完全に説教ムードに包まれた周囲、キノコが人間に説教さえてるこの構図、実にシニールである。

「いいか！？　俺等はな、いざというときアンタを助けるようにピーチ姫から言われててな（ry」

※説教が長くなるので省略します

数時間後

「わかればいいんだ、わかれば。さあて、お前にそろそろ力を分けてやるぜ」

「マジですか!？」

まあなと鼻で笑いながらキノコが言う。

「よしいくぜ……おるうらあああああああああああああ
あああああああ！！！！！！」

「うわあああああああああああああああああああああ
あ!!!!!!」

「……うっ……うっ……あっ！」

まばゆい光に包まれたマリオ、気がつくまで背が伸びてることに気づく。

まさかこれだけかよ……と普通なら思うが低身長がコンプレックスだったマリオには歓喜以外の何者でもなかった。

「ひゃっほう!!!」

アイテムの力を借り力を得たマリオ、そんなマリオの旅はまだまだ
続く!!

t o b e c o n t i n u e d

第2話 旅×敵×味方? (後書き)

後半ややいい加減になっちゃいました、すみません。

ではまた次回〜。

「NGシーン」

「俺の名前を知らないとはな……まあいい、俺はマリオ……お前を殺す人間だああああああ!!」

「ダニィッ!?!」

ゴシヤッ!!

テリユ、デデッデデデデデン♪

『GAME OVER』

第3話 ※四年という月日はゴリラが変わるには十分な時間です（前書き）

ゴリラです、今回はとにかくゴリラです。

皆さん御存知、ドnうわなをするやめ（ry

マリオ「第3話、ひあういごーッ!!」

第3話 ※四年という月日はゴリラが変わるには十分な時間です

「いやっほう!!」

甲羅を蹴り飛ばし2、3のクリボーを一気に吹き飛ばす。

「いやっほううううううううううう!!」

「「ぎゃあああああああ!!」」

更に無敵アイテム・スター+燃える花(?)・ファイヤーフラワーを取ったマリオはまさに無双だった。

虹色に光る体のままクリボーの列を吹き飛ばす、ノコノコをファイヤーボールで燃やす。

敵にとっては正に地獄絵図といっても過言ではなかった。

「だあはっはっはっ!! 俺、最強!」

完全に天狗となったマリオはファイヤーボールを連射しクリボーを

燃やしていく。

しばらく浮かれていたマリオだったが、ゴールバーが見えた途端懷から地図を取り出し眼を通す。

「…っと、あの城がゴールか」

案外楽勝だったな、と若干の物足りなさを感じるマリオ。

階段を上り華麗に舞うとゴールバーの先端にちよびっと指を当てて城の上に着地する。

ゴールバーの旗が降りるのを確認するとマリオは城の中へと入っていった……。

俺の視界には今、とんでもない奴が写っている。

そいつは4年前となんら変わっておらず、俺同様に眼を見開き驚愕している。

互いに忘れはしないその顔……まさかの四年前の”宿敵”との再開とは……。

「…なんでお前がこんなところにいるんだ……ドンキー!!」

「…でよう、最近Jrの奴が”算数なんて出来るわけない!”って言い出してな」

「へえ……ゴリラにも勉強嫌いがいるもんなんだな」

互いに胡坐をかきながら何気ない話をする二人。

一体何故この二人、こんな風になってんのか!?

遡ること、3分前————

「ドンキー、お前なんでこんなところに」

「おおマリオじゃないかうホ、久しぶりウホ」

ドンキーの応答にマリオは思わずはあ?と頭にクエスチョンマークを浮かべる。

それもそのはず、4年前彼等は敵同士でありその因縁は今でも続いてるとマリオは思っていた。

だがドンキーは違った、話を聞くうちにマリオは彼のその後について知った。

ドンキーは自らの罪を認め、見事更生したのだ。

まあ最もあの事件の裏にはただドンキーが婚期終盤だったので一国も早く誰かと結婚したかったという逸話があるのだが。

「ほう、ピーチ姫を助けるために旅をしてるウホか？」

「いやピーチ姫救出はおまけ、俺はただ冒険を楽しみたいだけなんだ」

「ええ！？ 優先順位がおかしくないか、ソレ！？」

マリオの発言にドンキーの突っ込みがはいる。

突っ込み時のみ語尾にウホをつけなくなるのは仕様です。

「で、お前は何でこんなトコに？」

「ああ、実は俺も同じでピーチ姫を救出するために旅をしてるウホ
どうやらドンキーの目当ては救出後の謝礼らしい。

そういえば救出した物には褒美を差し出そうって書いて有ったな、
とマリオは思い出す。

「まあこれも何かの縁ウホ、俺もお前の旅に同行していいウホか？」

「ああ、構わねえよ。どうせ最終的には俺もクッパ城へ行くしな」

「そうか、じゃあしばらくよろしくウホ」

「ああ」

二人は軽く握手をすると城の扉を開け次なるステージへと向かったのだった……。

おまけ

「次のステージは多分、ア・〇オア・〇ーみたいなところだと予想」

「ねえーよ!! 絶対、ありえねえだろソレ!？」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第3話 ※四年という月日はゴリラが変わるには十分な時間です（後書き）

マリオの旅にドンキーが同行。

…ってかゴリラに婚期もくそもあったのだろうか……？

ちなみに基本マリオがボケ、ドンキーが突っ込みです。

ではまた次回……。

第4話 土管を抜けるとそこにはネバーランドがあったんだ（嘘）（前書き）

ここ最近、忙しいせいで一話一話が短い……。

まあそれは二日置き投稿のせいってのも一理あるんですけどね（苦笑）

マリオ「第4話、ひあういごおおおおおおおお!!!!」

※プロットと大幅に違うので戦闘シーンを追加しました

第4話 土管を抜けるとそこにはネバーランドがあったんだ（嘘）

次のステージへ向かおうとしたマリオ達の先に有るもの……。

それは配管工なら誰でも知っている。そう、”土管”だ。

「土管だな」

「そのまんまウホ」

土管は地下へ繋がってるらしく若干警戒しながらも二人は土管の中へ入っていった。

土管の入り口から落ちていくマリオは華麗に宙で一回転し着地する。

対してドンキーは空中でボールのように回転するとそのまま地面に突っ込む。

「あっははははは！！　ダッセ！　滅茶苦茶ダッセえ！！！！」

思わず口に手をあてて大爆笑するマリオ、そんなマリオにドンキーのラリアットが吹き飛ばしたのはいうまでもないだろう。

頭部から少量の血が流れているドンキーと思いつきり吹っ飛ばされ首の調子がおかしくなったマリオ。

明かりもない地下をマリオとドンキーは進んでいく。

おぼつかない足元であるく二人に突如三匹クリボーが襲撃する。

「グハッ！！ 奇襲か！？」

「こいつ等…どうして俺等の居場所がわかったんだウホ！？」

それは簡単、この暗闇に何日もいた彼等にとって暗闇の空間で敵を見つけるなど何の造作もないことだ。

ふらつくマリオ達にクリボー三匹がジェットストリームアタックの要領で突っ込んでくる。

「クソ、これでも喰らえッ！！」

「「「ぎゃあああああああああああああ」」」

マリオの手から放たれたファイヤーボールが直撃し三匹は火柱にな

った。

大分目も暗闇に慣れてきたのでいつもの調子で進んでいく。

そんな時、

「なあ……コレどうやって通るウホ？」

ドンキーの指差す先には宙に浮くブロック、その上にもブロックが連なり下には小さい隙間が空いている。

「どう通るって……簡単だろ、こうだよ」

マリオは寝転がるとブリッジの要領で腰を上げ両手両足を動かし虫のような動きで隙間をくぐる。

「な」

「いや、おかしいだろオオオオオオオオ!!!!」

サムズアップ+ドヤ顔のマリオにドンキーの突っ込みが炸裂する。

「おかしいって何が？」

「いや、普通は走ってそのまましゃがみこんでくぐり抜けるもんだろ!!」

「んなゲーム的なこと現実でやってられっか」

マリオの言葉に渋るドンキーは先ほど例に出した方法で隙間をくぐりぬけた。

その後も軽快につき進む二人、だったが……

「おい、土管があるウホ」

「ホントだな、よし入ってみようぜ」

三つ並んだ土管の右端の一本目に入ろうとしたマリオとドンキー。
だが

「キシヤアアアアアアア！」

「ギイアアアアアアアアアアアアアアアア……!!?!?」

三本の土管全部から出てきたパツクンフラワーに完全にビビリ一目散に逃走した。

そのせいかゴール前の土管でも

「な、なあ、この土管は……大丈夫ウホよな……？」

「お、お前入って確かめてこい」

「ふざけんな！！ もしいたら俺食われるだろ！？」

こんなやりとりが十分くらい続いて、ゴールできたのはこの更に二十分後のことだった……………。

t o b e c o n t i n u e d …….

第4話 土管を抜けるとそこにはネバーランドがあっただ（嘘）（後書き）

散々ビビったマリオとドンキーですが次までにはちゃんと克服すると思います。

ちなみにネタばれですがマリオ一行にはまだまだメンバーが加わります。

ではまた次回〜。

お知らせ

更新のペースが二日に一度じゃやっぱ作者が死ぬので一週間に一度にしたいと思います。

あと第五話の原稿が投稿しようとした途端ネットにつながらなくなり真っ白に……orz

気力的な問題もありますがすぐに作り直すのでしばしお待ちを。

それでは予告だけ

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ!! (予告)

1ー3、空中ステージ。

前ステージが地下だったのに対しここは上空、落ちれば陸までまっさかさまである。

更に足場と足場の間も広く、上空ゆえの恐怖感も襲い掛かる。

高所恐怖症にとっては地獄みたいなステージである。

マリオ「いやっふう!!」「」

ドンキー「ぶるあああああああ!!!!」

マリオとドンキー、かつてのライバルが手を組めばまさに無敵だった。

例えるなら悟空とピッコロみたいなもんである。

???「—————多人数が少人数をいたぶるとは…あまり関心せん
な」

お知らせ（後書き）

完成までしばしお待ちを……。

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ!! (前書き)

プロットでは本編だけなら全39話予定です。

何かキリがいいな………ちなみに更新ペースは不定期になりそうです。

ですが12月は比較的作者は暇を持て余しているので

その内に大量のストックを生産(?)しますので。

マリオ「第5話、ひあういごおおおおおおお!!」

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ!!

1-3、空中ステージ。

前ステージが地下だったのに対しここは上空、落ちれば陸までまっさかさまである。

更に足場と足場の間も広く、上空ゆえの恐怖感も襲い掛かる。

高所恐怖症にとっては地獄みたいなステージである。

だが”彼等”にはそんなもの通用しなかった…………。

「いやっふう!!」

「ぶるあああああああ!!」

「」「ぎいやあああああああ!!」

30匹ほどいた敵があつというまに全滅。まさに集団いじめられである。

マリオとドンキー、かつてのライバルが手を組めばまさに無敵だった。

例えるなら悟空とピッコロみたいなものである。

何故、彼等には高所への恐怖が通じないのか？ それは簡単、単に耐性があるだけである。

元々ドンキーはゴリラなので木登りで高い所は既に慣れており、マリオもドンキーコング事件とビル解体の仕事ですっかり耐性がついていた。

人間、何事も経験しておくべきである。

「よし、行こうぜ」

「ウホ」

『……………』

次へと進む彼等を見る視線が二つ。

一つは敵意の目、もう一つはそれを観察するかのような目。

当然、マリオたちはそれに気づかず先へ先へ進んで行く……。

「……………」

ここについてから俺はようやく違和感に気づく、最もドンキーはまだ気づいていないが。

俺が感じていた違和感…そう、ここまで来るのに最初に襲ってきた奴等を除いてどこにも敵がいないのだ。

もしかや待ち伏せか……………、と思った時だ……………。

「止まれ!!」

突然、目の前に赤い甲羅を背負ったノコノコが現れる、その後ろに何匹か……………。

……………ってあれ…? ひいふうみい……………何十、いや何百もいるぞ!?

「貴様がマリオだな？」

「ああ、それがどうした」

「そうか、ならば問答無用！！！！」

突然の宣戦布告と共に赤ノコノコの背中に羽が生える、後ろにいる奴等も同様に羽が生えている。

「マリオの首は我等、パタパタ隊が頂いた。いくぞ！！！！」

掛け声と共に一斉にパタパタ軍団が襲い掛かってくる……………勝機はあるか…………？

「グハッ！！」

「ウボォー！！」

「ハハハ、どうしたどうした？　それで終わりか」

空中から襲い掛かってくるパタパタ軍団にフルボッコにされるマリオとドンキー。

先ほどから何匹か落として入るが、圧倒的な数と上空からの攻撃に一方的に苦戦していた。

「死ねッ！」

隊長格かと思われるパタパタがマリオに向かい突進してくる。

それをマリオは横へ受け流すと同時に腹部に回し蹴りを喰らわせパタパタを叩き落す。

負けじとドンキーも上空から急降下してくるパタパタをパンチで吹き飛ばす。

だが二人は連戦とステージ間で休みを取らなかったのが祟り、既に体力が底を尽きかけていた。

「これでトドメだッ！！」

空中からパタパタがロケットの如くマリオの背後から突っ込んでくる。

前方にばかり気をとられていたマリオ、反応できず直撃しようとした時――――

「———多人数が少人数をいたぶるとは…あまり関心せんな」

その声と共に突っ込んでくるパタパタが真っ二つになる。

斬ったと思われる黒い球体らしき体をしている”ソイツ”はマントを羽織り右手に黄金の剣を握っている。

「だ、誰だ、テメエ!？」

「名など無用」

その言葉と共に黒い”ソイツ”は一瞬で姿を消す。

そしてその数秒後、パタパタ達は自分の目の前が真っ暗になっていることに気づく。

慌てて誰もが動こうとした途端———

パタパタの大群は一瞬にして全員地べたに倒れてしまったのだ。

「大丈夫か？」

『……あ、あっ、はい』

ボールみたいな一頭身騎S>ジャキン!!…強くてカッコいい騎士がマリオたちの方を向く。

マリオ達は目の前で起こった一瞬の出来事にしばし啞然としていたがすぐに正気に戻る。

「…あの」

「おま…貴方は一体誰なんだウホ？」

恐縮気味に聞くマリオとドンキー。

ブロックの上にたたずむかっこい(?)騎士はフツ、と鼻で笑う。

「私の名はメタナイト、通りすがりのただの剣士さ…縁があつたらまた会おう」

そう言い残すとメタナイトは一瞬にして二人の視界から消えた。

「メタ…ナイト…」

「……なんだかクッパよりも厄介な奴が出てきたウホ」

マリオとドンキーは先ほどの彼の剣技を思い出し冷や汗をかく。

果たしてメタナイトは敵なのか、味方なのか———？

t o b e c o n t i n u e d

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ!! (後書き)

まさかのメタさん参戦。

彼はこの作品では一騎倒千ならぬ一騎倒万（本気を出せばそれ以上）

という三国志の呂布もびっくりの怪物です（笑）

ちなみに彼はこの後もちよくちよく出るので応援よろしくお願いします。

ではまた次回〜。

第6話 VS クッパ

ステージ1-4、1面最後のステージでありクッパとの対決の場でもある。

ちなみにこのステージには敵が一匹もないのが特徴。

正に”決闘”にふさわしいステージである。

城の中に突入したマリオとドンキーを溶岩の熱気が襲う。

溶岩が流れてる時点で少なからずともこの城は地中深くか火山帯付近にあるのは確実：はずである。

っていかそうじゃなかったらおかしい。

「ついにクッパとの対決ウホ」

「…予想よりかなり早いな……まあ、いい。とりあえずまずはクッパ倒してピーチ姫救出すつぞ」

最終決戦（？）の場に早くもついたことで若干緊張感がないマリオ達。

だが打倒クツパの意志は一応あつた。

先へ進むマリオ達を熱気とファイヤーバーが襲う。

マリオとドンキーは当然のようにこれらの罠をくぐりぬけひたすら前進する。

アクション慣れしている二人にはどうってことないのだ。

「グオオオオオオオオオオオオ!!!」

クツパの雄たけびと共に前進するマリオ達に炎球が飛んでくる。

それを素早くジャンプで回避すると、マリオはクッパの立つ闘技場に着地する。

クツパは仁王立ちし、その後ろには足場を固定しているワイヤーとソレを斬るための斧がある」。

背水の陣のつもりなのだろうか、とマリオ。

仁王立ちしていたクッパがマリオに向かい前進してくる。

「グフフフフ……待っていたぞ、マリオ」

「俺アてめえに構ってる暇は無エ、冒険がまだあるんでな。悪いがさっさと倒させてもらうぜ」

「フン、行くぞ!!!!」

クッパが口から火炎弾を連射する、マリオはそれをジャンプで回避するとクッパの背後に回り――

「あらよつと」

「え? あ、ギアアアアアアアアアアアア!?!?!?」

……斧でワイヤーを切断し、クッパは足場とともに溶岩の中へ落ちて行った。

あっという間の勝利に唾然とするドンキーを横目にマリオは奥に進む。

「おい、ピーチ姫。助けにきてやつ――」

「Thank you, Mario. Help a princess peach and the remaining friends early!」

和訳 ありがとう、マリオ。早くピーチ姫と残りの仲間を助けてあげて!

そこにいたのはピーチ姫では無くその部下のキノピオだったのだ。

「……………つていうことは、まさか！」

ドンキーが溶岩に落ちたクツパの死体に目をやる。

が、浮かんでいたのはクツパではなくクリボーの死体だった。

……………どうやらマリオ達の旅はまだまだ続きそうである。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
…………….

第6話 VS クッパ（後書き）

今回は特になにも書くこと無いのでまた次回〜。

追伸 ……最近、恋姫×るろ剣小説を書いて見たい、もしくは見たい…。

第7話 昇龍と波動と竜巻旋風（前書き）

勘違いバトル勃発。

マリオ「第7話、ひあういごおおおおおおおおおおお
お！！！！！」

第7話 昇龍と波動と竜巻旋風

ステージ2—1

「いやっほう!!!」

「ぶるあああああああああ!!!」

「」「ぎいやあああああああああ!!!??」「」

ここでもマリオとドンキーはいつものように暴れまわる。

クッパ城への第一拠点が破壊されたことでマリオ達はクッパ軍から

”凶悪な害虫”とされていた。

それゆえに警備も一層硬くなっている…筈なのだがこのザマである。

「……………」

快調に進んでいくマリオ達。

だがマリオ達は気づかなかった、自分達を見ている男の視線に……。

「今回は随分早く城についたな」

「簡単すぎウホ」

あっという間にゴールへと辿りついたマリオ達。

だが彼等がゴールバーを過ぎようとした時……

「波動拳！！！」

突如、声と共にマリオ達に向かって青い光弾が飛んでくる。

それを素早く側転で回避するマリオ、回避しきれず光弾に当たりぶつ飛ぶドンキー。

「オイオイ……何だ、今の……!?」

「貴様が”クッパ軍団”の頭目・マリオだな！」

マリオはその言葉に啞然としながら技を放った男の方を見る。

赤い鉢巻、白い胴着、鍛え上げられた肉体……雰囲気からしても相
当な武人である。

「ちょ、オイ、アンタ！ 勘違いして「問答無用！！」」

マリオは男の飛び蹴りを素早く避けると男の背中に掌底を叩きこむ。吹っ飛ぶが男は受身を取り素早く立ち上がりマリオにボディীবローをおみまいする。

強烈な一撃に顔を歪めるマリオ、男の右拳を払うとバック宙で間合いを取る。

「くっ……痛ウ……！！」

腹部を押さえながらマリオは男を睨みつける。

実力でなら自分、ドンキーをも上回ってると確信するマリオ。

「やはり頭目ともなると中々強いな……」

「テメェ……だから俺はクッパ軍団の頭目なんかじ「波動拳！！」ッ
！話を聞けェ！！」

マリオは波動拳を回避すると無数のファイヤーボールを男に向かい放つ。

これにはさすがに男も反応できず一斉にファイヤーボールがオレンジ色の閃光と共に爆発する。

完全に今ので倒れたな、と確信するマリオ。だが煙の中にたたずむ人影にマリオは目を見開いた。

煙が晴れると共にマリオは更に驚く。

男は胴着と体に煤がっただけでそれ以外はほぼ無傷だったのだ。

「て…テメエ……あの攻撃をどうやって防ぎやがった!!?」

「簡単だ、すぐさま爆発の上に跳んで逃れただけだ」

こうなったら……、と拳を強く握り締めるマリオ。

ソレを見たのか男もすぐさま技の構えを取る。

「最後に教えてやろう、俺の名前は”リュウ”。お前を倒した男の名だ!!」

「くっ…勘違い野郎が……俺はクッパ軍団なんぞの頭目じゃあ無エつての!!」

「…ならそれが真実か否か……その拳で証明しろ!」

「上等だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!
!!!!!!」

駆けだしたマリオが高くジャンプする、その拳は赤き炎を纏わせて。

「くらええええええええええ!!!!」

そのまま猛スピードで急降下するマリオ、それと共にリュウも拳を握り高く跳び上がる。

「はあああああああああ!!!!」

「昇龍拳!!!!!!」

二人の拳がぶつかり合うとともに眩い閃光が当たりを包みこんだ――。

激闘から数秒後、立ち上がったリュウは地面に突っ伏しているマリオを見る。

彼の言っただことは本当だったのか、と後悔するリュウ。

とりあえずここにいたらいずれ起きたマリオにフルボッコにされる
のが確定なので彼はそそくさにその場を去った。

t o b e c o n t i n u e d

第7話 昇龍と波動と竜巻旋風（後書き）

リュウのスペックはスト2時代です。

それではまた次回くくくく。

第8話 おさかなさんといっしょ……アレ、イカと人間とゴリラもいるぞ？（普

久々にはっちゃけたサブタイからのスタートです。

クリスマス番外編……書けたら書きたい、いやでも書くこと無いな（苦笑）

マリオ「リア充、爆発しろ」

いや、なに物騒なこと言ってんですかマリオさああああん!？

第8話 おさかなさんといっしょ……アレ、イカと人間とゴリラもいるぞ？

「あゝ、痛で……」

「あんにやろう……今度会ったらたじやスマさん！」

リュウの波動拳を受けた腹を押さえながら立ち上がるドンキーとその隣で青筋浮かべるマリオ。

まあ、前回あんなボロクソにやられたんだからしょうがない。

しばらくマリオの機嫌が良くなるまでにかなりの時間がかかったことは言うまでもないだろう。

「うーん……土管から潮の香りがするウホ」

「潮の香り……ってことは次は海か！」

急にテンションが高まるマリオ。

海といえばビーチ、してビーチと言えば水着ギャル。

何期待してんだコイツ……、とドンキーはマリオを白けた目で見て
いる。

「よし！ 行くぜええええええ、海が俺を呼んでいるうううう
ううう！……！」

「へいへい」

マリオは勢いのまま猛スピードで土管の中へ入る、ドンキーもそれ
を追うようにして土管の中に入った。

「…………マジ、ありえねえわ…」

マリオのテンションが先ほどは見違えるくらい低くなっている理由は言うまでも無い。

土管の先はビーチ…ではなく水中だったのだ。

しかも回りに水着ギャルなどおらず、いるのは赤、緑色のプクプク位である。

そんなトボトボと泳ぐマリオにイカ・ゲッソーが近寄ってくる。

ゲッソーはクッパの手下なのでマリオを発見した途端、襲い掛かっていったのだが……

「…………失せろ」

普段のマリオからは想像出来ない位の殺気に慌ててUターンしたのだった。

ドンキーは体中から負のオーラを放つマリオを横目で見ながら一人黙々と泳ぐのだった。

その後もマリオの体から放たれるオーラによって敵との戦闘は全て回避できた、が……

「オイ、マリオ！ ゴールだぞ」

「……………ああ……」

「おい、しっかりしろ！！」

その反動故に半ば廃人同然になったマリオを引きずるのに時間がかかったり

「へ…へ…ぶえくしょおい!!！」

「おいゴホッ、おまゴホッ、汚ねえウホゴホッ!!！」

上がってから着替えもせずいたため二人は風邪を拗らせたのだった
……。

t o b e c o n t i n u e d …….

第8話 おさかなさんといっしょ……アレ、イカと人間とゴリラもいるぞ？（後

ちなみにマリオと一緒に旅してるドンキーは今のクランキーコングです。

この頃、今のドンキーが何してたのかは作者も知りません。

それではまた次回くく。

第9話 押すなよ…絶対に押すなよ!! b y ドンキー (前書き)

今年最後の投稿です。

…何故だろう、サブタイトルから異常なフラグ臭がするぞ…?

マリオ「ボンバギンシュジャブパゴセザ!!」

マリオさん、ここではリントの言葉で喋ってください。

第9話 押すなよ…絶対に押すなよ!! b y ドンキー

ステージ2ー3

ここのステージは大きな一本橋であり、真下の海面からの距離は50 m。落ちれば即死である。

またここは50 mも下の海面から跳んでくるプクプクと強い潮風で有名だったりする。

さて一方のマリオ達、二人は互いに橋のすぐ手前で静止している。

高い所はそこまで苦手ではない二人、だが今回は訳が違った。

「マ：マリオが先に行けウホ」

「ふ、ふざけんな！ この強烈な風プラスこんな橋：渡るのは自殺行為だ！」

そうこの橋、メチャクチャ細いのである。

幅は僅か20cm足らず、当然手すりも無いうえ強烈な潮風が吹き荒れている。

確かにこんな状況で渡るのは自殺行為だがこれではいつまで経っても進めない。

しびれを切らしたマリオがドンキーに強制的に行かせようとした時、

「こんなところで何立ち止まっているんだ、お前達？」

「「あ、メタナイト」」

二人の視線の先には相変わらず妙な位置に置かれている一枚岩の上に乗ったメタナイトがいた。

「こんな橋、さっさと一人づつ渡っていけばいいだろう？」

「いや、あのなあ……」

マリオが事情を説明する、メタナイトは確かに、と相槌を打ったが考えは変わらない。

「風が吹くのなら一人づつ、”慎重”に行けばいいだろう」

「ダアーツ！ クソツ、話をまるでわかってくれない……」

「それはこちらの台詞さ」

そう言い残すとメタナイトは漆黒の翼を広げ空へと旅立った。

素早く退散するメタナイトに舌打ちする二人。

それから数分後————

とうとうこの男がしびれを切らした。

「もういい！　俺が先に行くウホ」

「エッ、あつ、おい！　大丈夫なのか！？」

「フン、慎重に進めばいいだけウホ」

ドンキーは素早く橋に足を踏み出すとそのままの調子で一步二歩と進んでいく。

さすがかつて工事現場に美女連れて建て籠った男。

手馴れた足取りで先へ先へと進んで行く。

マリオが気が着くと既にドンキーは橋を半分まで渡っていた。

誰もが好調に進むかと思った中、事件は起きた――！！

ババババババツ！！！！！！

「ウホオ！！　なんだあ！？」

ドンキーがドンキーの真下から無数のプクプクが飛び上がってきたのだ。

これに驚き一瞬バランスを崩すドンキー、だが悲劇はこれで終わらなかった。

ビュオオオオオオオオオオ！！！！

まさかのこのタイミングでこれまでと比べ物にならない位の風が吹いてきたのだ。

……さあこうなったらどうなるだろう？

バランスを崩し立とうとした所に超強風……結果は当然……

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？？」

「ド、ドンキーイイイイイイイイイイイイ！！？」

ドンキーは見事なまでにまっさかさまに海面へ落ちていった。

マリオが慌てて走り出す、どこかに間に合って欲しいという心があったからだろう。

バランスなぞ関係無しに突っ走るマリオ。

ドンキーの立っていた場所に立ち腕を伸ばした時にはもう遅かった。

海面に……ドンキー乏しき遺体が浮かんでいたのだ……。

「う…うう…ウワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

雄たけびと共にマリオは走り出す。

跳んでくるプクプクなぞ気に止めず、吹く潮風にさえ全く気に止めない。

彼の心はドンキーの死で埋め尽くされていた。

そしてマリオは……ただ友の向かおうとしていた場所へと走り続けたのだった。

マリオは本当の意味でいい奴になれたのかもしれない。

走り終えたマリオは全体的に呼吸もひどく荒くなっていた。

アドレナリンが放出されたのだろう、マリオは体にひどい疲労感を憶えた。

だがそれより気になっているのは――――

「ドンキーが死んだらこの小説の主役は完全に俺になるんだよね？」
くニイイイ（笑）

……………前言撤回。

やはりこの小説のマリオはただの腹グロメタ野郎でした。

果たしてマリオの運命は、海に落ちたドンキーはどうなるのか！？

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第9話 押すなよ…絶対に押すなよ!! b y ドンキー (後書き)

それでは皆さん、よいお年を。

マリオ「ラダ、サギベンガゴグ!!」

……マリオさん…ここではリントの言葉で (r y

マリオが何て言ってるかですが

前書き「今回の主役は俺だ!」

後書き「また、来年会おう!!」

です、グロンギ語使ってスミマセンでした。

では、また来年〜〜。

第10話 vs大魔王（自称）クッパ・2代目（前書き）

随分遅い、あけましておめでとうございます。

2012年も駄作ながら頑張って書いていくのでよろしくお願いします。

マリオ「2012年も『こんマリ』よろしく！」

第10話 vs 大魔王（自称）クッパ・2代目

こんマリ・前回までの3つのあらすじ

1つ・何の前触れもなくしゃしゃりメタナイトが登場

2つ・ドンキーが橋から転落

3つ・ドンキーの転落に黒い笑みを浮かべるマリオ

ドンキーの生死は！？
そしてマリオはクッパにどう立ち向かうのか！？

ステージ2ー4

「いやっほう！」

マリオは従来のステージ同様、次々と城内のトラップを突破していく。

ファイヤーバーだろうがマグマだろうが彼には通じない。

そこからはマリオの超人的身体能力と豊富な経験の凄さが伺える。

そしてクッパ城突入から28秒後……

「おい、クッパ。遊びに来てやったぞ」

「早ッ!？」

流石のクッパもマリオの到着スピードには驚愕。

普通に考えてあのトラップを30秒足らずで突破できるわけが無い。

こいつはクロックアップでも使えるんじゃないかとクッパは思った。

「……まあいい…マリオ! いざ勝負!」

「キャモーン」(中。中。中)

堂々と仕切るクッパにマリオは挑発で返す。

大魔王(自称)クッパ・2代目VSスーパー配管工・マリオ

勝負の火蓋が斬って落とされた!!

※以下、擬音と僅かな台詞だけでお楽しみください。

バキィ！ドゴォ！ベキィ！ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！ベキィ！ドゴ
ォ！バキィ！ズドッ！ドスッ！バコッ！バキィ！ドゴォ！ベキィ！
ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！ベキィ！ドゴ
ォ！バキィ！ズドッ！ドスッ！ドゴォ！ベキィ！ゴシヤ！ズドォ！
ドガァ！ドゴォ！バキィ！ズドッ！ドスッ！バコッ！バキィ！ドゴ
ォ！ベキィ！ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！
ベキィ！ドゴォ！ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！ゴシヤ！ズドォ！ドガ
ァ！ビシィ！ズダッ！コイーン！バキィ！ドゴォ！ベキィ！ゴシヤ
！ズドォ！ドガァ！ベキィ！ドゴォ！バキィ！ズドッ！ドスッ！バ
コッ！バキィ！ドゴォ！ベキィ！ゴシヤ！ズドォ！ドガァ！ゴシヤ
！ズドォ！ドガァ！ベキィ！ドゴォ！1UP！バキィ！ドゴォ！ベ

キイ！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ベキイ！ドゴオ！バキイ！ズドツ
！ドスツ！カス！

ドゴオ！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ビシ
イ！ズダツ！コイーン！バキイ！ドゴオ！ベキイ！ゴシャ！ズドオ
！ドガア！ベキイ！ドゴオ！バキイ！ズドツ！ドスツ！バコツ！バ
キイ！ドゴオ！ベキイ！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ゴシャ！ズドオ
！ドガア！ベキイ！ドゴオ！1UP！バキイ！ドゴオ！ベキイ！ゴ
シャ！ズドオ！ドガア！ベキイ！ドゴオ！バキイ！ズドツ！ドスツ
！カス！

バキイ！ドゴオ！ベキイ！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ベキイ！ドゴ
オ！バキイ！ズドツ！ドスツ！バコツ！バキイ！ドゴオ！ベキイ！
ゴシャ！ズドオ！ドガア！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ベキイ！ドゴ
オ！バキイ！ズドツ！ドスツ！ドゴオ！ベキイ！ゴシャ！ズドオ！
ドガア！ドゴオ！バキイ！ズドツ！ドスツ！バコツ！バキイ！ドゴ
オ！ベキイ！ゴシャ！ズドオ！ドガア！ゴシャ！ズドオ！ドガア！
ベキイ！

「オラオラオラオラオラオラオラオラ！！！」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ！！
！！

「あ……あッグラ……」

「立てよ、まだ勝負は終わりじゃねえぞ？」

ゲシッゲシッゲシッゲシッゲシッ！！！！

「さて、そろそろ死んだかな？」

「……………」

□　へんしゝかない、たたゝのしかはゝねのようたゝ。

「M A R I O w i n ! !」

無傷でクツパを屍にしたマリオは奥の部屋へと進んで行く。

「さあて……はあ、どうせここもキノピオだろ？」

正にその通り、マリオは奥のキノピオの姿を見るときもう一度深いため息をする。

（俺はこんな奴等助けるために旅をしてるんじゃないんだが……な……）
キノピオを開放すると1面の時と同様喋りだす。

『助けてくれてありがと……ってちょまつ！　まだ全部言い切っていない！！』

マリオはそれに耳も傾けずさっさと次のステージ・3-1へと向かって行った。

だがマリオは気づかなかった。

この時、マリオを後ろから尾行していた男の存在に……………。

果たしてこの男は敵か、それとも味方なのか？

t o b e c o n t i n u e d …….

第10話 v s 大魔王（自称）クツパ・2代目（後書き）

擬音が長すぎました、すみません。

それよりもさっきから腹が痛いのは何故だろう………？

ではまた次回……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9233y/>

こんなマリオでもいいじゃないか！！

2012年1月5日05時45分発行